

## 冷戦終結の世界史的意義

—— 帝国主義世界戦争の時代の終焉としての冷戦の終結 ——

瀬戸岡 紘

### 目 次

1. 問題の所在——冷戦終結の世界史的意義
2. 定義および関連する諸規定
3. システム・アプローチによる資本主義分析
4. 帝国主義世界戦争の時代——  
資本主義的發展のひとつの段階をなした時代
5. 冷戦の基本的性格——  
帝国主義戦争のひとつの形態としての冷戦
6. プロト世界システムとしての  
アメリカ的システムの世界展開
7. 資本主義的システムの世界システムへの転化

### 1. 問題の所在——冷戦終結の世界史的意義

#### 1. [徹底破壊的な対決・抗争の時代の転換点としての冷戦の終結]

ベルリンの壁の崩壊（1989年）とソヴィエト連邦の崩壊（1991年）、これらふたつの崩壊劇を、本稿では冷戦の終結を象徴する諸事件として位置づける。

資本主義列強間の対立抗争の爆発としての第一次世界大戦、大恐慌およびそれにつづく経済的・政治的破局のなかでの諸列強のさらなる激突としての第二次世界大戦、それにつづけて休むこともなくはじまった米ソの体制の存亡をかけた長く厳しい抗争としての冷戦、そしてその底流における、冷戦の基礎自体をもほりくずすような経済的・政治的諸力ないし諸関係の激変、要するに20世紀は、まずは、一連の対決につぐ対決の時代であったと規定されよう。

しかも、これにもう少し厳密さをくわえるならば、対抗者にたいして決定的に破壊的な形での対決をかさね、しかもそれに勝利するためにありとあらゆることをやってのけてきた時代であった、と規定されよう。当然ながら、そのような対決のなかでは、それと不可分の関係にあった、生産力および破壊力の爆発的発展や力関係の激変もこの世紀を彩ってきた。

だが、冷戦の終結をはさむ近年の世紀末的諸現象をみるに、国際政治経済諸関係のなかには、あきらかに従来とは異なった様相を呈してきているように思われる。政治経済諸関係の国際的ネットワークの緊密化にともなって、対抗者への徹底破壊的な闘争というよりも、内政干渉と妥協と相互浸透とによって表現されるような国際関係がめだってきた。日米間の経済摩擦とその交渉などは、そのような特徴のひとつの代表例であろう。また、東ヨーロッパ諸国のレジームの崩壊やソ連の解体、中国やヴェトナムでの社会主義のなしくずし的放棄など、過去の世界史上の相応の事件と比較したばあい、その変化の大きさほどではない混乱や流血も、そうした例のひとつであろう。ガルフ戦争で、あれほど世界をさわがせておきながら、フセイン政権の打倒すらしなかったアメリカの対応も、あるいはそういう例のひとつといえるかもしれない。ことし7月25日のイスラエルとヨルダンの和平成立も、冷戦時代とは異なる時代の流れが脈々とつづいていることを思わせる。冷戦のためにつくられたASEANも、かつての敵国をふくめた10か国への拡大とあわせて地域統合をめざしているが、これも冷戦の終結が逆もどりするものでないことをしめしている。各国に冷戦時代に形成された各種政党や団体なども、その多くが組織的再編や解体がおこなわれたか、こんごおこなわれる可能性が濃厚になっている。帝国主義と冷戦に代表されるような20世紀に固有のものすべてが、いまあらいなおされようとしているのである。同時に、米ソという、他に追隨のできる勢力の存在しなかった時代とは異なった、今日の国際諸関係のなかでは、むしろ地球上の一体化した世界のなかでの少しでも有利な地位や利権を獲得するための陰湿な抗争と妥協のおこなわれる時代となってきたように見うけられる。

## 冷戦終結の世界史的意義（瀬戸岡）

史上もっとも強力な破壊力を手にしながら対決をつづけてきた冷戦の終結は、過去百年という長期にわたる、敵対するシステムにたいする徹底破壊を基調とする時代（帝国主義世界大戦そのもの、およびそのヴァリエーションとしての冷戦、さらにそれに付随する激動と激変の時代）、およびその経済的土台としての相応の資本主義の発展段階にたいして、一応の幕をひくことを象徴する事件だったと考えられる。当然ながら、このような新しい事態は、その土台をなす経済的基盤が変化してきたことの結果だと考えないわけにはいかない。したがって冷戦の終結は、単純に抗争の時代が終結したことを意味するとは考えにくいものであり、経済的基盤の変化にともなって、あたらしいたたかひの時代がはじまったことを意味するものだと理解するほうが妥当であろう。したがって、本稿の目的は、冷戦の世界史的意義および冷戦終結の世界史的意義について、その政治経済学的側面を中心に検討するものである。

なお、本稿でいうところの冷戦とは、以上のコンテキストからもおのずとあきらかなように、米ソ間の軍事的・政治的・経済的・文化的、要するにありとあらゆる形態や手段をとって展開された競争と対抗を総体としていうのであって、単に一大国の世界支配やその支配への抵抗を総括するものとしていうのではない。大国の支配とそれへの抵抗にかんしていうならば、そのようなものは、いつの時代にも存在していたのであって、特殊今日的な歴史的性質をあきらかにするうえでは無内容にちかい。たとえば、冷戦を帝国主義アメリカとそれにたいする諸勢力とのあいだの対抗としてとらえることは、本稿のテーマからするならば、ほとんど何もひきだしえないと思われる。<sup>(1)</sup>

## 2. [諸外国で軽視されてきた冷戦の世界史的意義]

ところで、冷戦およびその終結の世界史的意義を、こんにち検討することの意味は、ほかにもある。アメリカ・ラディカル派—経済学からはS S A学派、政治学からはE. S. グリーンバーグら—の提起しているいくつかのアプローチ、たとえばシステム・アプローチ、レジーム・アプローチ、コーポレーション・アプローチなどには、現代資本主義の諸相を厳密に分析しよ

うとするばあい傾聴すべきものもあると思われる。だが、反面そのアプローチのローカル性のために、さしあたりアメリカ以外の諸国や国際経済論の領域では、にわかに分析のツールとなりにくい。<sup>(2)</sup> また、I P Eの理論についても、その有力な主張の中心概念としての覇権安定論は、結局のところアメリカの支配力を分析の中心にしてきた（ギルピン／キンドルバーガー）。さらに世紀末大不況に直面して、近年、長期波動論もふたたびさかんになってきているが、こちらも議論は、アメリカ大国支配論に収斂する傾向をもっている（SSA学派／I P Eからはモデルスキーら）。第2次世界大戦後のアメリカ経済や世界経済にたいして冷戦がもたらしていた意義をほとんど眼中におかないことは、ケインズ派・反ケインズ派の違いをこえて、さらにはラディカル派をもふくめて、戦後アメリカのすべての経済学派に共通する特質であった。しかも、そのような視角が西側の主要な経済諸学派に少なからぬ影響をあたえてきたうえに、ソ連崩壊などを契機として、いっそう支配的になる感がある。

だが、冷戦に集約されたところの、安定ではなく抗争、覇権ではなく泥沼の闘争、そこにこそ20世紀資本主義の特質、そしてまた資本主義の世界化過程の現代的本質があったはずである。今日の世界的な研究動向に一定の再考をうながす意味でも、冷戦がもっていた世界史的意義、あわせてその終結がもたらす世界史的意義を経済学のサイドから検討しておく必要がある。

## 2. 定義および関連する諸規定

### 3. [システム・アプローチの有効性]

資本主義発展の現代的本質を解明するのに、システム・アプローチ（たとえばアメリカ的システムというアプローチ）をとってみることは、メカニズムとしての資本主義の発展と現実の歴史的実在としての資本主義の発展とを区別しつつ、今日の世界史的局面を分析し解明していくうえで有効であると考えられる。資本主義が広範な諸国に普及はしたものの、かえってその発展段階

の格差は拡大し、資本主義諸国間における先進・後進間の対抗と支配従属の関係が錯綜するなか、さらに多くの植民地・従属国との複雑な諸関係とおりかさなることによって、不均質・不均等な発展のめだった20世紀の世界経済のなかでは、それら国際諸関係をまずは前提にすることもなく、資本主義を十把一からげにしてその発展段階を論じたのでは、かえってその全体像がみえてこないだろうからである。

資本主義は、その現実の過程では、排他的に形成するひとつの経済圏のなかで発展する。ここでいう経済圏とは、たとえば、国家によって総括されるところの国民経済がそうであるし、その国民経済が植民地・従属国を包含して形成する帝国主義的な経済圏もそうであるし、近年のEUにみるような諸国民経済を統合して形成される地域的経済圏や共同市場なども、そのような経済圏の例と考えてよいであろう。それぞれの経済圏は、資本主義としての共通の機構をもちながらも、現実にはそれぞれの経済圏ごとに異なった地理的環境や歴史的伝統をもち、異なった矛盾や対抗関係をかかえ、それゆえにそれぞれ異なった色彩をはなっている。現実に見ることのできる資本主義の発展局面や諸問題を解明していくうえでは、そのような色彩の異なる経済圏ごとに分析しつつ、それらを総合するという方法がどうしても必要になるであろう。システム・アプローチが有効であるという理由は、そのような意味においてである。

#### 4. 「体制」ないし「制度」の原語としての「システム」および「レジーム」

近年、日本語の経済学文献のなかには、「システム」という用語が氾濫している。というより、こんにち、研究書から新発売商品やこどものおもちゃの説明書にいたるまで、あらゆる領域で、一定のまとまったもの、組みあわさったもの、セットになったものなどに「システム」という用語が使用されているといってよい。もともと西欧の諸言語でも、経済学をふくめて、今日ではかなり広範にsystemという用語は使用されている。分割と特化を基調としながら発展してきた近代科学も、近年では体系性、相互連環性が重視さ

れるようになって、理学、工学、医学の方面では、この用語は多く使用されているようである。ちなみに古典学派やマルクスの経済学の文献では、systemという用語は、たとえばökonomisches Systemなどのように「体系」という意味で使用されてきた。

ところで、こんにち経済学関係の文献でわれわれが目にするsystemという用語は、これまでたいていのばあい、「制度」とか「体制」などという日本語に訳されていたものである。しかし、逆に「制度」とか「体制」という日本語は、すべてsystemという西欧言語に置換できるかというところではない。たとえばregimeという用語のほうが適切なばあいがいくらかもある。systemなる用語を適切に使用する道を整備しておくことは、今日の日本語でそれが特段の了解もなく使用されていることを考慮するまでもなく、今後の研究の発展にとって有益だとかんがえられる。たとえば、流行の「世界システム」論にたいする対応の方法も、「システム」をどのように把握するかによって相当にことなつたものになるものと思われる。

「システム」という用語は、レギュラシオン学派やSSA学派など新学派が「レジーム」などという用語とともに多く使用しているし、「システム」という用語は、近年では、わが国においても不用意なまでにふんだんに、しかも論者によりまちまちな意味で使用されているのが現状である。とはいえ、「システム」と「レジーム」とについて、当面ひろく了解された使いわけは存在していないのが実情である。すくなくとも経済学の研究者のあいだには、今のところそんなものは存在しないといつてよいだろう。政治学者たちのあいだでは、「レジーム」という用語は、一定の安定的な権力の編成、さまざまなコンフリクトを調整していくうえでの一定の規範、それらを背後からささえていく支配的イデオロギー、などがととのっているような総体をさしているばあい使用する傾向がつよいようである。その邦訳には、「体制」や「制度」があてられてきた。これにたいしてしばしば「システム」という用語があてられてきたものを対置しつつ関連させてみるならば、ある一国（およびその影響下にある領域）の資本主義は、それ自体がひとつの「システム」

であり、その資本主義的システムのなかで生起する、諸勢力の一定の妥協により可能となる一定の安定した拡大・成長局面は、「レジーム」ということになりそうである。このような限定をしたばあい、近年流行のレギュラシオン・アプローチやアメリカ・ラディカル派のアプローチのなかにしばしば登場する「レジーム」という概念や「システム」という概念は、同一ではないものの、比較的理解しやすくなる。レギュラシオニスト（パリ派）は、キーワードのひとつとして「蓄積体制」という用語をもちいるが、これは原語では *regime d'accumulation* である。たとえば、「フォーディズム」といった、一定の安定的な経済の成長の時期も、ひとつの「レジーム」なのである。アメリカのラディカル派政治学者グリーンバーグは、*policy regime* という用語をもちいて、アメリカ200年の政治経済史を再検討する。戦後の全盛期アメリカのレジームは、*Corporate Liberal Regime* であり、そのまえには *New Deal Regime*、さらにそのまえには *Progressive Regime* が成立していたといったぐあいに、五つの「レジーム」が形成されては崩壊するという歴史がアメリカ史を構成していたと分析する。しかも、グリーンバーグは、こうしたアメリカ史全体をつらぬいている体制を「アメリカ的システム」*American system* と呼ぶのである。

ともあれ、上記のようなここでの問題意識には、この「システム」（ないし「レジーム」）という用語は大変つかいやすい用語なので、本稿の課題にてらして、それに一定の限定をくわえつつ使用することとしたい。

##### 5. 「メカニズム（機構）」、「システム」、「レジーム」の区別と相関関係

ここで、「体制」とか「制度」として一括されてきた「システム」と「レジーム」とを、「メカニズム（機構）」とともに、とりあえず以下のように限定したい。

「システム」とは、ひとたび形成されたある社会的「メカニズム（機構）」が、現実の社会で維持され、再生産されていくなかでは不可避である一定の不安定さや不確実さをもちながらも維持され再生産されていくなかで、ある

種のゆらぎをともなうてえがきだされる軌跡，あるいはそういう歴史の総体のことであり，そのなかで実現される時々の相対的安定・成長局面が「レジーム」である。ある一国およびその影響下にある地域の資本主義は，その政治的・経済的・社会的構造物とその運動ないし発展の全体がひとつの「システム」であり，その資本主義システムのなかで，一定期間，諸勢力の均衡と妥協が成立して経済的にも比較的安定した拡大・成長局面が実現される局面は，「レジーム」ということになる。一口に「資本主義」といっても，現実の世界に存在しているものは，「メカニズム」自体ではなく，さまざまな個性をもった「システム」としてであり，その時々の変化は「レジーム」をめぐるおこなわれるのであるから，世界経済や国際関係の今日的局面での現実の変化と発展の内容を問題にする本稿のテーマに即していえば，「メカニズム」自体よりも，「システム」や「レジーム」こそが着目されるべき対象であるといわなければならない。

なお，「システム」という用語は，自然科学や工学など広範に使用されるものであるが，とくに一個の有機的総体としての社会をさしていうばあい，しばしばおこなわれるように「社会システム」と呼称することができる。本稿でいう「システム」という用語も，そのような「社会システム」の意味で使用されている。また，現代政治学では，複数の近代的西欧諸国家の並立する状態の総体を「国際システム」と称したり，ウォーラステインのように，複数の異文化の複合体でありながら，「資本主義」（内容的には「外国貿易」）のネットワークで結合された，上記の意味での「国際システム」を「世界システム」と称したりする例もみられるが，これらについては本稿での用法とは異なっているというばかりか，本稿の基本的主張にかかわってくるので，その点は，あとで言及する。



### 3. システム・アプローチによる資本主義分析

#### 6. [システム・アプローチによる世界史の再考]

ちなみに、そのような定義で古代以来の世界史を整理してみよう。世界史上には、一定の地域と時代に、一定の生産力や経済的諸関係をもとに、一定の政治権力をともなった文明が、いくつも興隆し衰退していった。そのような文明のうちに包摂される世界は、それぞれ有機的で自律的なシステムをなしていたとかがえられる。それぞれのシステムは、それぞれの地域や時代あるいは人間の獲得した生産諸力などの諸条件にうまく適合できたばあい爆発的に成長し、周辺諸社会に拡延し長期間その生命力を維持したとかがえられる。古代エジプトの諸王国やアッシリア帝国、アカエメネス朝のペルシア帝国、都市国家から世界帝国になっていったローマ、ムハンマドにはじまり初期カリフ時代をへてウマイヤ朝とアッバース朝の時代に空前の展開をみせたイスラム帝国、マウリヤ朝のインド王国やムガル帝国、唐帝国や清帝国などの中華帝国、アステカ帝国やインカ帝国、マリ王国やモノモタパ帝国のような前近代アフリカの諸国家などは、それなりのシステムとして存在していたと考えられる。それぞれの歴史上のシステムは、それぞれ別個の特性をもっていて、その発展の規模やテンポもそれぞれのものであったとかがえられる。したがって、そのようなシステムのなかから、古代奴隷制的、中世封建制的、あるいはアジア的などといった範疇を検出することには一定の意義があるとしても、あえてそれらのいずれかにあてはめようとするには無理が生じることはさけられないと考えられる。

このように考えるとき、産業資本主義を確立したあとのイギリスや独立後のアメリカなども、それぞれ、ひとつのシステムであったという理解もなりたってくる。ウォーラーステインは、過去500年の世界史の全体をひとつのシステムとして把握するが、今ここでは議論しないでおくならば、むしろ「世界システム」はこれまでのところ未完で、現実存在していたのは、イ

ギリス、アメリカなど一国システムが世界的に影響力をもっていたものにとどまっていたというべきである。

## 7. [ひとつの社会システムとしての資本主義]

近代の資本主義的社会システムもそのようなさまざまな歴史上の社会システムのうちのひとつとして成立したものにすぎない。資本主義的社会システムは、古代いらいさまざまな歴史上のシステムのなかのかたすみに存在してきた商品経済が、生産（剰余価値生産）をとらえたところからはじまった。剰余価値生産のメカニズムが市場メカニズムと一体不可分になることによって、それは社会システムを編成しうるメカニズムとしての地位を獲得したのである。したがって資本主義的社会システムとは、たんなる市場メカニズムではなくて、それをもふくむところの、資本主義というメカニズムによって編成された社会システムなのである。同時に、このシステムは、それまでのすべての歴史上のシステムとはちがって、他のシステムにたいする破壊力の強さ、しかも爆発的とでもいうべき膨張主義的性向、それゆえこのシステムが全地球的規模で拡大していくという点で、きわめて特異なシステムでもある。

資本主義的社会システムは、まずは、イギリスにおける産業革命をへて、イギリスで歴史上の現実の社会システムとしての形成をみた。それは、国民経済を形成し、国民国家として総括されるシステムである。それとともに産業革命は、植民地を宗主国の資本主義の発展のための原料供給地および市場として、宗主国のシステムに結合する（インド、エジプトなど）。だがそれは、あくまで従属的に結合されたにすぎないのであって、宗主国のシステムそれ自体になったのではない。解体され、混乱状態におかれ、宗主国に従属させられたとはいえ、植民地の社会は、宗主国の社会と完全な一体になったのではなく、宗主国から切断された別個の隷属的な社会をなしていたのである。資本主義のシステムは、市場を必要とするから、世界各地をそのシステムに結合しようとするが、そのことは、世界がひとつのシステムになることをた

だちに意味するものではない。換言すれば、世界市場は、世界システムとは同一ではない。イギリスにおける資本主義の展開は、世界市場を形成したが、世界システムは未完であり、当時としてははるか未来の可能性にすぎなかったと見るべきである。商品経済一般と資本主義経済との厳密な区別のなされていないウォーラステインは、過去500年の近代世界史をそれ自体「近代世界システム」として論述してしまっているが、マルクスは資本主義のメカニズムを厳密に分析するところから出発して「世界」の次元まで上向したとき、それを「世界市場」としての把握にとどめていた。本稿のコンテキストは、すでにあきらかなように、ウォーラステインのそれではなく、マルクスのそれということになる。

#### 8. 「長期波動・ヘゲモニー・センターの移動の本質」

本稿における近代資本主義の社会システムにたいする以上のような理解は、ウォーラステインの「世界システム」論とは異なったものであるということにとどまらない。それは、「長期波動論」や「ヘゲモニー移動論」など、世界的長期不況やアジアへの生産拠点シフトをまえに、近年注目をあびはじめている諸理論とも異質のものである。ここでは紙幅の都合上ごく簡単な検討にとどめて言及にする。

そもそも、「世界システム論」、「長期波動論」、「ヘゲモニー移動論」などは近代資本主義世界を一体のシステムとして把握するところに共通する特色をもっている。世界を一体のものとして把握するから「世界システム」という範疇がたてられるのであり、世界を一体のものとして把握するからそのなかでの「長期波動」の検出が問題にされるのであり、世界を一体のものとして把握するからそのなかでのヘゲモニーないしセンターの移動に議論がむいてしまうのである。むろん現象としての世界の一体性、現象としての長期波動、現象としてのヘゲモニーの移動なら、多少の実態分析を試みってみるならばキャッチできるであろう。しかし、現象は、かならずしも本質と同義ではない。「長期波動」とか「ヘゲモニー・センター移動」などと映って見えて

いることはある種の本質の現象にすぎないのであって、いずれも表面的外観を本質と取りちがえているにすぎないというべきである。

前項でのべたように、資本主義が社会システムとして、現実の歴史のなかに登場してくるとき、一気に世界全体が単一のシステムとして編成されるわけではない。したがって、現実の世界に存在しているものは、これまでの世界史では、ひとつ、ないし複数のシステムがシステムの外部に影響をあたえたり、相互にさまざまな関係をもったり、抗争したりしているものである。そのなかでは、なるほどセンターとなる国家は時代ごとに移動するであろうし、そうしたこととの関連で経済的指標も上昇と下降の波をえがくであろうし、それらを包含するものとして世界が単一の生き物のようにも見えることもあう。だが、ヘゲモニーの移動も長期波動も単一の生き物のように変動することも、資本主義的システムの不完全な世界支配、すなわち非資本主義世界の収奪などによる不安定、資本主義列強間の対抗による不安定などを内包したところの、資本主義的システムの不完全な世界支配の所産だと考えるべきである。したがって現実に存在したものは、たとえばイギリス的システムが確立されるまでにポルトガル、イスパニア、オランダなどの重金主義的、重商主義的システムの一時的国際化であり、英仏の抗争であった。イギリス的システムの国際化が進展するなかでおこったことは、後発のシステムによる挑戦であり、それらのあいだでの抗争であった。全体としていえることは、資本主義的システムは、具体的な国民経済に体现されながら、複数形成されつつ、それらが相互に抗争をくりかえすということであった。長期波動とは、そういう歴史的過程が表面的にえがいてみせる幻影にすぎない。

「世界システム論」，「ヘゲモニー移動論」，「長期波動論」などからは、アメリカのラディカル派がその影響を受けているし<sup>(3)</sup>，一般に西欧の諸理論も多くがこれらの議論を共有している。そのような研究の潮流については、本稿の第2項でふれたとおりであり、本稿は、そのような諸潮流への批判でもある。

#### 4. 帝国主義世界戦争の時代――

##### 資本主義的発展のひとつの段階をなした時代

#### 9. [複数の資本主義的システムの対抗としての資本主義的帝国主義]

もともと無国籍的性格をもつ資本は、国境をこえ、周辺諸民族に商品貨幣関係と資本主義的生産関係とを拡張する。したがって、資本主義のシステムの展開が世界市場を形成することは、周辺諸国民に資本主義の成立を助長することにもなる。主導的システムのレジームは、世界各国にモデルとして拡張していく。資本主義的市場経済の影響を受けた周辺諸国民は、たいていのはあいみずからのシステムの自立と発展の可能性をつみとられてしまうのだが、なかには先発の資本主義との摩擦をおこしながら、独自のシステムとして成長する国民もでてくる。ことなるシステムのなかでそのモデルが展開するのである以上、主導的システムとまったく同一のシステムとして別個の国に再現されることなどありえないのであって、成長にともなって、それは、あたらしいシステムになり、しかもばあいによっては対抗者にさえ転化してしまうのである。イギリスにたいしてドイツが、アメリカにたいして日本あるいはアジアが、それぞれ前者のシステムを前提にしながら前者に対抗するシステムになっていったのは、このような過程の帰結であった。フランス、アメリカ、ドイツ、日本などがそれである。それらは、フランス的システム、アメリカ的システム、ドイツ的システム、日本的システムといったぐあいに、程度の差をもちながらも相対的に自立したシステムとして、先発のイギリス的システムと対立をふかめていかざるをえない。後発のシステムが先発のシステムと対抗するのに十分成長したとき、すなわち複数のシステムがそれぞれ自己に従属的に結合した市場圏をさらに拡張しようとしてぶつかりあうようになったとき、資本主義は帝国主義の時代に突入する。

帝国主義とは、したがって本稿のコンテクストからすれば、有力な資本主義的システムとしては単一のシステム（現実の世界史上ではイギリス的システム）が地球を支配的に圧倒する段階を通過したあと、複数のシステムが競合し対

抗しあうようになった段階のことをいうのであり、あえて先まわりしていえば、資本主義が世界をおおう単一のシステムの原理にまでいたらない段階をいうのである。帝国主義という用語の使用にかんしては、しばしばたんなる膨張主義の意味で使用するケースが存在する。<sup>(4)</sup> しかし、膨張主義それじたいは、資本主義システムに固有のものであって、帝国主義の規定としては、何の意味ももたない。帝国主義とは、ここでの規定のように、複数のシステムが地球上で並存するようになった段階での資本主義の存在様式として理解しなくてはならない。というのは、複数のシステムの並存する段階においては資本主義に固有の膨張主義は、その一般的形態を脱皮して、対抗者の打倒・絶滅を膨張主義の不可分の一体とするようになるからである。したがって、帝国の存否または興亡をかけた膨張主義は、あきらかに資本主義一般のそれとは区別されるのであって、そこにこそ、帝国主義を資本主義のひとつの段階として規定する意味が存在するのである。

#### 10. [帝国主義段階の矛盾の爆発としての帝国主義世界大戦]

帝国主義世界大戦（以下「帝国主義世界大戦」をたんに「大戦」と略記することがある）は、そういう帝国主義段階の主要矛盾が爆発的に発現する局面である。大戦は、他国の資本主義的システムの存在じたいが自国のシステムの存在をおびやかすようになったから、それを排除しようとして、ありとあらゆる手段を行使する抗争であるから、経済力、軍事力、そして国民のひとりひとりにいたるまで総動員していくことになる。ちなみに、20世紀はホロコーストの時代と考えられる（ヒトラーの、スターリンの、旧日本軍の、ポルポトの、そして今日のルワンダの蛮行、と世紀全体をつらぬいて、世紀単位のホロコースト犠牲者の数としてはそれ以前とは比較にならぬほど多い）が、このような蛮行は、他者を絶滅するために何でもやってのけてきた時代のコンテクストと無関係だとは絶対にいえないであろう。無差別潜水艦戦、空襲、原爆投下などとホロコーストとは、殺しつくすという意味では、まったく同一の発想のうえで断行されてきたことである。20世紀が帝国主義世界大戦の時代であったとい

### 冷戦終結の世界史的意義（瀬戸岡）

う意味は、きわめて大きかったのに、その点を軽視する風潮がアメリカの学界を中心に支配的であることの問題は、あらためて留意しておくべきである。

複数のシステムが相互に衝突しあい、未曾有の破壊と殺戮を展開するようになった、大戦の時代にあつては、あるいは、帝国主義が資本主義の最高かつ最後の段階と映ったとしてもあながち不思議ではあるまい。論理的な次元でのみいうならば、二度の大戦は、あそこで資本主義の諸システムがもろとも崩壊することもありえたといつてさしつかえないだろう。じっさい、両大戦とも敗戦国ドイツにかぎらず、先勝国イギリス、フランスの疲弊は相当なもので、国内の経済循環は崩壊し、植民地を喪失し、唯一アメリカの支援と援助のみが大戦の荒廃からすくわれる道であつたことを想起すれば、この点はどうなづけよう。なぜアメリカがこれら二度の大戦で一定の局外にあつたのかということにかんしては、帝国主義的対抗の主要国がヨーロッパという限定された地域にひしめいていたということと関連するが、それについては、本稿の主要なコンテクストからはずれるので割愛する。<sup>(5)</sup>

帝国主義世界大戦は、資本主義の諸矛盾のもっとも激的な爆発という方法をとつた解決の形態である。大戦は、資本主義の矛盾の爆発という意味では恐慌と類似しているが、その爆発が経済の循環機構の部分的破壊にとどまる恐慌とちがって、大戦のばあい、複数の資本主義的システムの競合に耐えきれなくなったところで、国家をあげ、国民を総動員し、経済力のあらんかぎりを出しつくし、なおそのうえに従属下においた各国・各植民地の人民と財産までことごとく道づれにして、相互に生死をかけて徹底的な破壊活動を作りつくすものであるから、恐慌のように周期的にくりかえされるものとは考えにくい。むろん、大戦はかならず一回かぎりでもくりかえさないということは、事実をみてもいえないのであるが、逆に大戦がくりかえされた事実を根拠としながら、周期的にくりかえされるものと考えことはもっとできない。大戦は、基本的に一回かぎりでも終わりうるものと考えたほうが適切である。

## 11. [くりかえされた帝国主義世界大戦]

さて、現実の歴史的過程では、帝国主義世界大戦は、2回あった。しかし2回目は、1回目と同一ではないことはいうまでもないが、本質的には、1回目の再版であった。多少具体的にいえば、第二次世界大戦は、第一次世界大戦が未解決にのこした課題、すなわち、爆発的に成長をつづける資本主義にとってはしだいにせまくなってゆく地球のなかで競合する複数の資本主義的システムが相互に他者との共存をゆるせなくなった状態を解決するという課題、世界史の今日的段階からふりかえって一層具体的にいえば、帝国主義的諸列強の対抗するヨーロッパをそれとはまったく異質の世界（こんにちEUとして実現している）に再編するという課題を、第二次世界大戦後にもちこしたものであった。そもそも両大戦とも、ドイツのイギリス、フランスにたいする挑戦（イギリス的システム、フランス的システム、ドイツ的システムの対決）としてはじまった点、しかもドイツの再度の挑戦がドーズ・プランを契機とするヨーロッパ3大列強の対抗の構図を再建したことによって可能性がひらかれていたこと（ちなみに第二次世界大戦後のマーシャル・プランを契機とするヨーロッパ再編は、3大列強の対抗する道を断った）などは、第二次世界大戦が第一次世界大戦の再版としての性格をもっていったことを物語っている。

だが、その第二次世界大戦でさえ、大戦の本来的課題を未解決のままのこすことになってしまった。すでに第一次世界大戦のときいらいはじまっていた米ソの対抗が、第二次世界大戦を経過することによって、再版どころか、きわめて大規模に増幅されて、本格的展開をすることになり、世界の再分割抗争は、あたらしい局面をむかえることになる。けっきょく第二次世界大戦が達成したことは、ヨーロッパの秩序の再編にとどまり、地球規模でのシステム間関係の再編という課題は、米ソ冷戦とその冷戦後にゆだねられることになったのである。



## 5. 冷戦の基本的性格 —

### 帝国主義戦争のひとつの形態としての冷戦

#### 12. [帝国主義世界大戦のヴァリエーションとしての冷戦]

資本主義的帝国主義とは、有力な資本主義的システムがひとつ（イギリス的システム）だけ地球を支配的に圧倒することがゆるされなくなった発展段階、したがって複数のシステムが競合し対抗しあうようになった段階の資本主義のことであり、世界をおおう単一のシステムを創出することができないかぎり人類がのがれることのできない資本主義の発展段階をいう、ということであった。冷戦とは、20世紀末の今日の世界史的段階から結果的にいえることは、そのような帝国主義戦争の特殊な形態でもあったし、換言すれば、形を変えた第三次世界大戦であった。まずは、その理由の要点だけをしめすなら、つぎのようになる。

イギリスとは比較にならぬほど大規模かつ強力に世界化したアメリカ的システムは、しばしば「パックス・アメリカナ」といわれ、あたかも「アメリカの世界」、「アメリカの世紀」を現実のものにしてきたかのように言われてきたが、実際には、ついにソ連を克服できなかった。周知のように、ソ連が崩壊したときにはアメリカ的システム自体もグローバルなシステムへの転化の能力を喪失していたのである。

一方、20世紀の社会主義の思想と運動をリードしたソ連やボリシェヴィズムは、システム（諸レジーム）を形成してはいたものの、社会主義の内実までそなえたシステムは実現できなかった。けっきょく課題は、レジーム維持の一点に集約されざるをえなくなり、先発資本主義への生産力キャッチアップが目標となり、アメリカとの抗争のなかで、経済的には大量生産と成長の虜となり、軍事的には総力戦にも似た対抗の泥沼にはまりこみ、ボリシェヴィズムの存在意義をうしなっていた。その過程は、かつて後発ドイツが先発イギリスにキャッチアップする過程と類似する色彩をもっていた。

アメリカもソヴィエトも、それぞれ相応に勢力圏を形成し、国際的につよ

いインパクトをあたえうるシステムとして、半世紀ちかく対峙した。このように複数のシステムが対決することは、現代世界史のひとつの必然である。こうして冷戦は、当事者の主観的意識においては資本主義と社会主義との経済体制（システム）をめぐる抗争だったとしても、世界史的・客観的には近代世界史のなかで必然的に発生してくる複数の近代的システム（近代化指向システム）群の対決の一形態となってしまう、本質的に大戦と同質のものになっていったのである。歴史結果的に見るならば、冷戦は、両大戦と近似する性格をおびてゆき、第一次世界大戦の終戦後いらいの米ソの対抗という、ますます激化していく、基本的に妥協のできない関係を清算する場となっていったのであった。

### 13. [冷戦をとおして帝国主義強国になったアメリカ]

アメリカは、ヨーロッパの三大列強にくらべると帝国主義国としての特徴を濃厚にしてくるのはおそかった。アメリカがなぜそのような過程をあゆんだのかについては、いろいろ論じられており、興味ぶかいことではあるが、ここでの主題に直接かかわる重要な問題ではないので割愛する。<sup>(6)</sup>

しかし、アメリカが第二次世界大戦後、冷戦に突入していくことで、新種の、だがまぎれもない帝国主義国へと転化していったことはまちがいないところである。なぜなら、この冷戦に勝利しなければならないという国家目標にひきずられて、結局アメリカは、いやおうなしに強大な国防省組織と軍隊、膨大な軍事支出、核兵器を頂点とし宇宙にまでのびた新兵器の開発、それとむすびついた軍産複合体、それゆえの巨額の財政赤字、経済構造のひずみ、社会問題への不適應などといった諸問題をかかえこむことになっていったからである。そればかりか、アメリカは、露骨な植民地領有にはあまり手をかさなかつたとはいえ、政治的・経済的・軍事的な各種さまざまな機構を創出しては、諸国を支配してきた。たとえばNATOをつうじて西ヨーロッパを、日米安保をつうじて日本を従属下におくとか、IMFやIBRDをつうじて先進国から発展途上国にまでさまざまな経済的影響力を行使するとか、

#### 冷戦終結の世界史的意義（瀬戸岡）

経済援助・軍事援助をつうじて発展途上諸国を支配下におくといったことがそれである。しかも、朝鮮戦争やヴェトナム戦争のような相当大掛かりな戦争から中南米諸国やアフリカなどへの軍事介入にいたるまで、各種の紛争の当事国ともなってきたのである。

結局アメリカは、冷戦のなかで前代未聞の巨大な帝国主義国に成長転化し、しかも最後には、帝国主義国としてのみずからの重さにたえかねて自己崩壊への道をすすんでいったのである。冷戦こそアメリカをしてアメリカたらしめ、帝国主義国たらしめ、しかもその地位の剥奪まで運命づけてしまったのである。

#### 14. [ソヴィエト連邦とポリシェヴィズムの世界史上での評価]

冷戦を特殊な帝国主義戦争として理解するばあい、ソヴィエト連邦をはじめとするポリシェヴィスト諸国の評価は決定的に重要となる。なぜなら、もし冷戦が資本主義と社会主義をめぐるグローバルな階級戦争であったという面が第一義的に強調されなくてはならないのだとしたら、冷戦の規定はもう少しちがったものにしなくてはならなくなるからである。

ソ連および東ヨーロッパ諸国は、従来「社会主義」諸国として理解されることが多かったが、同時にそのような理解から生ずるさまざまな論理的矛盾にもくるしめられてきた。その経済的後進性、政治的自由や民主主義の問題など、数かぎりない。このような矛盾は、社会主義をその思想、運動ばかりでなく社会主義を指向する体制までふくめて社会主義と理解してしまったところ——溪内譲をはじめきわめて多数の論者——にあるといえるだろう。<sup>(7)</sup> しかし、旧ソ連・東ヨーロッパの政治的・経済的・社会的な状態（政策上の目標ではなく、あくまで現実に存在していた実態）を見るかぎり、20世紀に現存したものは、社会主義を指向するいくつかのレジーム（たとえばソ連のばあい、ネップ期のレーニンのレジーム、1930年代以降のスターリン的レジーム、フルシチョフ的調整期をへたあとのブレジネフ的レジーム、または再版スターリン・レジームなど）にすぎなかったものであり、生産力発展の未熟さと政治的民主主義の未成

熟のために、全般的に不安定な、それゆえ相当強圧的な政治的強力によってのみ維持するほかないシステムにすぎなかったと考えるのが妥当である。しかも、それにくわえて、外部からつきつけられた冷戦という苛酷な条件は、これらのシステムが目標としていた社会主義をいっそうのこと遙かかなたの夢へととおざけていった。遠大な国民的目標のまえに、現実として存在しているものは、社会主義はおろか、資本主義にさえ見おとりして飛躍の期待できない経済と政治的抑圧、そして国民的自信喪失となっていた。要するに、社会主義の思想と運動はあっても、20世紀にその体制は実現できなかったといわなければならない。ポリシェヴィスト国家が実行できた課題は、客観的には、先発資本主義へのキャッチアップにとどまったと言うべきであるし、さらに言えば、それさえ途中で挫折したといわなくてはならない。

かつて、後発ドイツが先発イギリスにキャッチアップし、さらにサーパスする（おいこす）過程で引きおこしたコンフリクトが大戦となって勃発したように、イデオロギー的にもきわめて対立的なポリシェヴィスト国家ソヴィエトが、あたらしくていっそう強大なアメリカの資本主義的システム（絶頂期の「アメリカ的システム」）にキャッチアップしてくるなかで、当然生じる国際的コンフリクトが、形をかえた大戦となってあらわれたのが冷戦だといわなくてはならない。しかも、ひとたびそのようなコンフリクトのなかにソ連とソ連型社会主義の支配的イデオロギーであるポリシェヴィズムが位置づけられてしまうと、すべては冷戦勝利の論理（生産力主義と軍国主義という論理）だけに解消されてしまうことになり、ソ連という国家もポリシェヴィズムというイデオロギーもその正当性が消失していったのである。

#### 15. [戦後の諸変化にもみる冷戦と大戦との類似性]

冷戦は、その終結にともなう諸変化も大戦と類似する。第1に、国境の変化をともなったことである。両大戦のばあいと同様に、冷戦後も、主として敗戦国側の被抑圧諸民族、すなわち旧ソ連および東ヨーロッパを中心にかなりの国境線が変更になり、あたらしい国家が誕生した。また大国の抑圧から

### 冷戦終結の世界史的意義（瀬戸岡）

解放された諸民族がかねてからの民族問題を解決すべく一気に抗争を展開しはじめた。これらのことは、帝国の解体を物語っているわけで、まさに大戦の後におこる現象である。

第2に、それまで外見上は堅固な結束をほこっていたような諸国の関係も、戦後は結束のみだれがはげしく、きびしい対抗関係にはいっていく点も共通する。両大戦のばあい、戦後は先勝国としての英仏や米ソの利害の対立が表面化していくが、冷戦のばあいも、先勝国を自認するアメリカはその同盟国日本をはじめ、ヨーロッパなどとの利害の対立をふかめていくことになる。しかもその背景には、アジアの生産拠点としての地位向上が、アメリカの経済的支配基盤を今後いっそうほりくずしていくことを予感させ、たんに現在の西側先進国だけにかぎられない、数々の深刻な対立も予想されている。

そして第3に、以上2点と関連していえることだが、双方の当事国自体が共倒れ現象をおこすことである。両大戦では、敗戦国ドイツはいわずもがな、先勝国イギリス、フランスとも、戦後の荒廃はいちじるしく、たのみの植民地支配も放棄せざるをえなくなり、そのためこれら諸国の衰退ははげしいものであった。冷戦の終結についても、米ソの衰退のはげしさは言うまでもない。解体したソ連は、世界の大国の地位から、北の発展途上国へと大転落してしまったし、アメリカについても膨大な双子の赤字と産業の衰退に病み、大統領が「アメリカ第一主義」をかかげたり、貿易交渉でははしたなくも発展途上国なみの保護主義的対応や脅しで自国経済の防衛にはしらなくてはならなくなるなど、かつての西側のリーダー格としての貫録も正当性もうしなくなってしまった。まさに大戦と同様、冷戦も総力戦だったわけで、戦後は、当事国の双方が共倒れになっていったのである。

このように見てくると、冷戦は、その終結のありかたまで大戦とおなじ基調をもっていたことが明らかである。

#### 16. [最後の大戦としての冷戦]

冷戦は、帝国主義世界戦争の時代をおわらせる帝国主義世界戦争となった。

その理由は、システムの存否をかけたこの冷戦のなかで、アメリカが近代世界史のなかで事実上はじめて資本主義のシステムを維持するためのグローバルな機構を、たとえ不十分でも、つくりあげていたことに関係する。冷戦の終結とアメリカの衰退のために、その機構は、資本主義のシステムが、近代世界史上はじめて、全地球的規模で、人為的ないし政策的調整機構として機能することになったと考えられるからであり、それゆえ、今後とも列強間の国家的・国民的興亡をかけた大戦ないしそのヴァリエーションがくりかえされるとは考えにくくなったからである。その点については、つぎの節でやくわしく検討する。

ともあれ、20世紀末の米ソ冷戦の終焉は、18世紀末のイギリス産業革命とフランス市民革命とに代表されるヨーロッパ近代史の転換、19世紀末ドイツの台頭を契機とする帝国主義時代への突入、に匹敵する大転換である。やや古い15世紀末のヨーロッパ人の世界進出とそれによる諸世界の地球大の連結を一応別とすれば、近代では、いわば百年周期で世紀末にめぐってくる近代世界史の転換点のひとつとして位置づけられるものといえよう。

## 6. プロト世界システムとしてのアメリカ的システムの世界展開

### 17. [冷戦時代のもうひとつの特質としての国際的システムの形成]

1989年のベルリンの壁の崩壊と1991年のソヴィエト連邦の崩壊という二重の崩壊劇は、冷戦の終焉をつげる鐘となったことはいうまでもない。また、同時に対抗者アメリカの経済的破綻と国際社会での政治的権威の低下についてもいうまでもない。過去2回の大戦と同様、冷戦もその当事者双方を共倒れにおいこんだ。とはいえ、冷戦が大戦と決定的に異なる点は、せまいヨーロッパ内部の諸列強（国民国家）間の対決から、アメリカとソヴィエトというヨーロッパの外部の大陸国家によるいっそうグローバルな対決へ、しかもそれが各大戦のざっと10倍という長期間持続したことに関連する。すなわちアメリカ的システムとソヴィエト的システムは、それぞれ国際的システムと

### 冷戦終結の世界史的意義（瀬戸岡）

して諸国民に（形式的な独立国であれ何であれ）従来かんがえられなかったほどの影響力を行使したばかりか、内政干渉まですることによって、みずからのシステムの世界化への過程をすすめていた。ソヴィエト連邦の存在は、諸国民に労働者の地位向上や福祉制度の確立を促進し、アメリカ的システムの世界的展開は、IMFやGATTに代表されるような西側の国際的秩序を形成させ、また両者の妥協は国連をはじめとするいくつもの国際機関を設立させた、などはそれらのなかのほんの数例にすぎない。また、それら以上に重要なことは、そのような過程で、民間貿易、多国籍企業の資本蓄積、国際的ネットワークを形成した金融とその取引（現物経済取引の50倍の金融取引）などの、いずれにもいえる爆発的拡大で、文字どおりヒト、モノ、カネの国際的相互依存関係の深化である。

一般的な言いかたをすれば、ある種の機関やルールやネットワークなどは、それらが一定の定着をはたすにつれて、しだいに創設の主導者からはなれて独自の運動論理をもつようになるものである。もっとも、ソ連の構築した国際的システムは、その母体そのものの崩壊によってあえなく消滅することになったが、アメリカが冷戦の過程で主導しつつ構築した国際システムのほうは、アメリカの覇権の低下とともに消滅するようなことはなかった。両大戦のさいも列強の経済圏、ブロックなどの形成がはかられたが、それらの国際的システムとしての正当性、そのなかでの生産力の発展がほとんど見るべきものをもたなかったのにたいし、冷戦期に形成されたアメリカ主導の諸機関とルールとネットワークは、一定の限界をもちながらも、冷戦時代における、資本主義を維持するためのグローバルな人為的・政策的な調整機構としての機能をはたし、しかもアメリカの相対的地位低下と無関係に現在にいたるまで、その機能をはたしつづけていると考えられる。そのような意味では、冷戦は、2回の大戦とは明確に区別されなければならないと思われる。

#### 18. [プロト世界システムとしてのアメリカ的システムの世界展開]

第二次世界大戦を契機に、政治、経済、軍事ともに圧倒的な力を獲得した

アメリカは、ソ連との対抗上、その力をますます拡大する方向で行動した。しかも、それは「ソ連の脅威」に対抗し、「自由」を擁護するというイデオロギーによって正当化されていった。そのなかでつくりだされたものは、以下のような国際的な機構、ルール、ネットワークであった。

第1に、ブレトンウッズ体制、GATT体制、およびその他各種の国際協定など、経済的な機構やルール。これにより、貿易の拡大および各国の貿易への依存は史上空前の発展をみる。

第2に、戦後復興から後進国開発にいたるまでの資金的・技術的等各種「援助」。従前の帝国主義時代では考えられない幅ひろいものとなって、アメリカ民間資本も進出しやすい土地柄へむけて各国が発展する基礎がつくられた。

第3に、アメリカ軍の世界各国への派兵、および各種軍事援助や軍事同盟によるアメリカ軍の世界的ネットワークの形成。

第4に、民間の間接および直接の投資の空前の拡大。これにより、史上はじめて多国籍企業・多国籍銀行が世界経済に意義をもってきたばかりでなく、飛躍的な展開をとげる。部品の製造や完成品の組立てが多国間にまたがることによって、相互に破壊しあうような帝国主義世界大戦が経済的に実行不可能になる基礎が形成される。

第5に、先進国首脳会議（いわゆる「サミット」）、G5やG7などの国際「協調」のための会議やプラザ合意などの「協定」による、先進国の相互「協力」体制。ドル、その他の通貨のレートを共同で「管理」するなど、国際間の一種システムとしての機能をはじめている。

こうして西側世界は、国家から民間まであらゆるレベルでの相互「依存」体質がふかまり、たとえば、アメリカの軍需物資が経済的ライバル日本の部品なくして調達不能となるなど、西側世界全体が運命共同体的な単一の機構、ルール、ネットワークのなかにくみこまれていった。しかし、反面、日米経済摩擦のその「解決」のための日米交渉にひとつの典型をみるように、かつてなく先進国どうしが相互干渉しあうようになった。これまで近代外交



## 冷戦終結の世界史的意義（瀬戸岡）

史では、内政干渉をつつしむことが独立国相互間での国際関係の維持の前提であったが、いまやそのようなことは通用しなくなっている。国際的諸関係がしだいに内的に緊密な関係で結合されたシステムとしての性格をもってきたことを意味している。このような状態は、それ自体「世界システム」と称するには依然として不完全ではあるが、「世界システム」に準ずる機能をそなえてきているという意味で、「プロト世界システム」と称することができるであろう。

### 19. [プロト世界システム形成の背景としての冷戦]

市場メカニズムに絶大な信頼をおく新古典学派やアメリカのヘゲモニーを強調する論者たちは、このような機構、ルール、ネットワークが市場メカニズムの機能やそこからくる内発的発展の必然の所産であるかのようにとらえる傾向がある。しかし、重要なことは、これらの展開が冷戦という市場原理の外側、あえていえば政治的外圧によってはじめて可能になった点である。たとえば、金融や貿易の機構やルール、そして「援助」は、ボリシェヴィズムの世界的拡大への対応がせまられていなければ、どこまで形成されていたか不明である。生産の国際化は、それをささえる生産力の発展が前提であるが、そこには、後で述べるように、冷戦での軍事的対応にせまられた軍事上の科学技術の開発が基礎にあった。国際的共同行動のための会議や協定も、冷戦下での内部体制強化の課題があったわけで、相互内政干渉もそのような周囲の状況があったからゆるされてきたことであった。このように考えるならば、市場メカニズムから上記のようなプロト世界システムが形成されたかのような議論は大いに検討を要するところである。

また、プロト世界システムが定着していくうえでも、冷戦が長期におよんだ点を軽視することはできない。長期化した冷戦は、各種先端産業を形成し、生産力のマイクロエレクトロニクス段階を開拓し、それがまたあらたな経済的基礎となってプロト世界システムを補強する関係にあった。一方で国際的共同行動というトレーニングを人類が体験し、他方でそれが一時的なもの

して消失しないための経済的基盤も形成されたことで、帝国主義世界大戦は、しだいにアナクロニズムへと転化していった。それゆえ冷戦は、最後の帝国主義世界大戦であり、帝国主義世界大戦後の時代を準備する契機ともなつたと考えられる。

## 20. 「パックス・アメリカーナ」と言いがたいプロト世界システム

これらの「プロト世界システム」は、「パックス・ブリタニカ」とよばれたイギリス的システムの世界展開を量的にも質的にもはるかにしのいでいたという意味では「パックス・アメリカーナ」といえなくもないが、ついにソ連を克服できなかった、すなわちソ連が崩壊したときはアメリカ自体も世界の覇者というには衰退してしまつた、という意味では、かつてイギリスやフランスがドイツと対峙したとき最終的にいずれもが圧倒的な勝者になれなかったのと類似しているという意味で、やはり「パックス・アメリカーナ」と称することは適切でない。一方、ソ連のつくってきた機構などは、東ヨーロッパとキューバや若干のアフリカ諸国を政治的に抑圧したり、イデオロギー的につよい影響をあたえたり、経済的合理性をこえた援助、等でようやく維持されていたものであって、とても「プロト世界システム」としての要件さえそなえてはいなかった。「パックス・ルッソ・アメリカーナ」についてはいうまでもなく、「パックス・アメリカーナ」についても、戦後半世紀ちかひ一時代を表現する用語としてはあまり適切であるとは言いがたい。この時代は、やはり冷戦の時代であつたというのがもっとも適切である。「パックス・アメリカーナ」という用語の含意する平和と安定は、この時代を正確に表現していないというのが本稿全体のコンテキストである。

## 7. 資本主義的システムの世界システムへの転化

### 21. 「先進国間の平準化傾向と相互内政干渉ないし相互破壊傾向」

だが、冷戦が強要してアメリカにつくらせたプロト世界システムを、ほか

### 冷戦終結の世界史的意義（瀬戸岡）

ならぬ冷戦がアメリカをしてそのコントロールを放棄せざるをえなくさせた（ただし経済的基礎についてのことであって、アメリカ政府・軍部の政治的意図としての「放棄」は別問題）。その過程でさまざまなあたらしい傾向が生じている。その第1が先進国の平準化傾向である。まず、資本主義の発展にともなう経済成長率が傾向的に低下している（「資本主義の発展にともなう経済成長率の傾向的低下の法則」）。資本主義は、その発展の一定の段階で成長率が限りなくゼロにちかづいていく、ということは経験則からほぼ判断可能である。したがって、その作用の結果おこるところの先進諸国の経済機構と生活水準の類似化傾向、一人当たりのGDPの平準化もおこっている。その結果、西ヨーロッパ、アメリカ、日本などの先進国化した諸国の文化的イデオロギー的相異も縮小している。そこに第2に、商品、資本、人、文化などの国際的交流の密度の増大などが背後から第1の傾向を増幅し、あらたな抗争と妥協の両面の前提を用意する。その結果、すでにヨーロッパの時代はおわったといわれながら、西ヨーロッパ諸国がかつてのローマ帝国やペルシア帝国のようにみるかげもなく衰退していったような過程をたどらなかったように、現在のアメリカも、親の代ほど豊かになれないという面を一方にもちながらも全体としては単純に衰退への一途をたどっていくとは現状をみるかぎり判断しにくい。むしろ先発のヨーロッパにキャッチアップしてきた結果、現在の先進諸国が一体化をさらにつよめていくと考えられる。

しかし他方では、資本主義の一定の発展段階での平準化により、利害をめぐる抗争はますます激化し、相互内政干渉（近代的外交の基本ルールの崩壊）はますます常態化する（日米構造協議や包括協議はその典型例）。それとともに、また、諸資本、ないしその政治的表現としての政治諸勢力のあいだでの妥協も、今後の時代のひとつの特徴となってきた（ここでも日米協議は象徴的である）。妥協と相互依存が、先進国化した諸国の生存様式になってきているのである。EU、NAFTA、ASEANなどの地域統合も、そのような過程の一形態として把握することができる。しかもそのなかで、新時代の抗争と妥協にとって障害となる、家族から民族まで、地域社会から国家まで、あ

りとあらゆる伝統的諸制度が再検討され解体の危機に直面する。すなわち、平準化という量的次元では諸国民間では納得されずに、均質化にむけて相互に類似しあうものを否定しあうという力学が作用するのである。

以上が現在進行中の世界の一体化過程の内実である。

## 22. [資本主義的システムとしての限界性]

だが、問題はそれにとどまらない。いっそう深刻なことは、このような過程が資本主義的システムのなかで進行する以上、きわめて破壊的な性質をもつということである。まず、地球自然環境の破壊（それを「開発」という）、そして、人類の社会的・文化的遺産の破壊（それを「進歩」という）、さらに、人間の肉体の限界をこえるところまでの酷使と破壊（「働きすぎのアメリカ人」、日本「過労死」）などがそれである。しかもそういうとき、事態の収拾に強大な影響力を発揮しうるのは、往々にして巨大資本などのメイジャー勢力となる。<sup>(8)</sup>

トフラーの「第三の波」や、ドラッカーの「ポスト資本主義社会」論が指摘していることからは、その過程のなかで発現する表面的諸現象のほんの一例にすぎない。むしろ実態はかれらがえがいていることとは裏腹でさえある。地球上での無秩序と混乱と紛争は、資本主義のもとでその一体化がすすむのである以上、むしろその過程とともに深刻にならざるをえないと考えられる。

## 23. [世界システム転換の正当性と転換の形態]

それゆえ、現在形成されつつある世界システムは、最初からその転換が正当性をもっている。その転換とは、世界大戦の時代に想定された大戦を契機とする世界革命などとはまったく異質のものであり、周蜜化したネットワークのできてしまった現代世界のなかで、環境・文化・人間を保存しつつおこなわれる転換である。東ヨーロッパ諸国での政権崩壊とソヴィエト連邦そのものの崩壊、中国やヴェトナムでの「社会主義」のなしくずし的放棄、これらは、あたらしいシステム転換の形態を予感させるものであったとかがえ

#### 冷戦終結の世界史的意義（瀬戸岡）

られる。帝国主義世界大戦の時代は、資本主義的システムを解体して社会主義的システムを構築するというスローガンは、自然な流れであったと考えられるが、システムの巨大化ないしグローバル化した現代、しかも環境問題など地球の有限性つまりシステムの舞台そのものが資本主義的システムの動乱を許容しうるには限界となってきた現在の現在、課題は、むしろ資本主義的システムの解体というふうにはたてられないものになっているからである。20世紀の発展過程は、ボリシェヴィズム型革命の形態すらアナクロニズムに転化せしめるほどの劇的なものだったのである。

#### 24. [世界市場の時代から世界システムの時代へ]

資本主義の経済的メカニズムが社会を編成したものをひとつのシステムとして理解するばあい、その外部に想定されるものとしての「世界市場」は考えられても、それ自体は「世界システム」などというわけにはいかない。マルクスが「経済学批判体系プラン」に「世界システム」などというものを想定しなかったのは、そのためである。イギリス的システムは、その国際化の過程で世界システムに発展することはついになかった（いわゆる「パックス・ブリタニカ」論的美化の問題点）。ドイツ的システムもまた然りであった。アメリカ的システムもそれ自体が国際化することによって直接的に世界システムに成長転化することはなかったというべきだろう（いわゆる「パックス・アメリカーナ」論も同様に問題）。ましてボリシェヴィストのシステムは、世界革命へと接続することがなかったために、それも社会主義的世界システムに成長転化することはなく崩壊していった。しかし、二度の大戦と大戦のヴァリエーションとしての冷戦の時代を人類は経過することによって、地球上に複数のシステムが並存する時代をものりこえたかに見える。その過程で、ソヴィエトとの対抗のなかですくなくソヴィエトの影響をうけた、アメリカ的システムの国際化したものでありながら、アメリカ自体がそのコントロールを放棄せざるをえなくなってしまったプロト世界システムをのこした。それが、約500年まえに地球の一体化がはじまっていたら、はじめて世界シス

テムとよべるものに発展していくシステムの核となる可能性をもったと考えられる。

アメリカ的システムが世界的に展開していくことによって、事実上、世界システムは形成されつつあった。それを文字どおりの世界システムにさせなかったのは、冷戦であった。だが、反面、冷戦があったからこそ、アメリカ的システムは、急速に世界システムにむかって成長することも可能となったのだった。半世紀にわたる冷戦と、その後の冷戦の終結こそ、本稿がテーマとしてきた意味での世界システムの形成を可能にするものだったのである。

#### 注

- (1) 本稿では、冷戦という用語を、米ソ間の軍事的・政治的・経済的・文化的などの、ありとあらゆる形態や手段をもとって展開された競争と対抗を総体としてさすものとして使用し、単に一大国の世界支配やその支配への抵抗にかんする抗争といった意味には使用していない。しかし、冷戦の解釈には、つぎのようなものも存在する。

たとえば、菊井礼次氏は、「冷戦政策の戦略目標は、あくまで資本主義諸大国が世界の政治・経済を思いのままに左右できる国際秩序の維持・存続であり、したがってそれを打破しようとする反帝国主義勢力全体——そこでは中ソをふくむ現存社会主義諸国のみならず『第三世界』の民族開放勢力や『非同盟』諸国、さらに資本主義諸国での民主的変革勢力や反核・平和運動も重要な構成要素をなしている——を対決目標とするのであって、ソ連やその同盟国（ワルシャワ条約機構加盟国）にかぎられるわけではない」（菊井礼次『現代国際政治構造論』、法律文化社、1989）とのべられるが、巢山靖司氏は、かれを支持しつつ、さらにつけくわえて、つぎのようにいう。

「米ソ対立を中心に規定した冷戦論の延長線上には、ソ連が崩壊した以上米ソの対立は消滅したことになり、それ以来現在、あるいは未来にはバラ色の国際情勢が展望されることになる。しかし冷戦を米ソ対立を包含するものの、より広い対立・矛盾より規定する立場からするならば、米ソ対立がおわったとしても、他の対立・緊張関係は別の形でのこることになるゆえ、バラ色の国際的世界が到来することなどは考えられないことになる」としている（巢山靖司「ポスト『冷戦』とその世界について考える」、『日本の科学者』1994年6月号、5～6ページ）。

しかし、そもそも大国の支配とそれへの抵抗についていうならば、そのようなものは、いつの時代にもあったのであって、冷戦をその程度のものとして規定す

### 冷戦終結の世界史的意義（瀬戸岡）

ることは、本稿が課題としているような特殊今日的な歴史的特質をあきらかにするうえではほとんど何もひきだしえないのであって、国際政治経済論や歴史学のうえでは無内容にちかいといつてよいだろう。

- (2) 拙稿「アメリカ・ラディカル派アプローチからの問題提起とその限界」、駒沢大学『経済学論集』第26巻第2号、参照
- (3) 「世界システム論」や「ヘゲモニー移動論」がアメリカ・ラディカル派にあたえている影響については、グリーンバーグ（たとえば拙訳『資本主義とアメリカの政治理念』、青木書店、1994）などに、おなじく「長期波動論」の影響についてはゴードン、エドワーズ、ライクラ（たとえば河村／伊藤訳『アメリカ資本主義と労働』、東洋経済新報社、1990）にそれぞれうかがうことができる。
- (4) 帝国主義と呼ばれるところの資本主義の支配形態をグリーンバーグは、つぎのようにのべるオコンナーを引きあいにしつつ叙述しているが、まさにふたりとも帝国主義を膨張主義一般でとらえていることがよくわかる。「資本主義以前の社会と資本主義の社会とではつぎのようにことなる。すなわち第1に、資本主義以前の社会では、経済的膨張は、不規則、非系統的で、正常な経済活動に統合されることがない。資本主義社会では、外国貿易と対外投資は、まさしく『経済成長の推進役』と考えられる。膨張は、国内経済または中心経済における経済活動のリズムをかならず維持し、規則的で、組織的で、恒常的なものとなっている。第2に、資本主義以前の社会においては、膨張から得る経済的利益は思いがけない利益で、たいていは、単なる突発的な略奪の形態で手にしたものである。資本主義社会においては、海外との貿易や投資による利潤は、国民経済の不可欠の一部をなし、実質のある手法と考えられている。第3に、資本主義以前の社会では、膨張の進行のなかで取得された略奪品は、おおくのばあい征服者の軍隊によって戦場で消費されてしまつて、本国経済には何の影響をあたえることもなかつた。資本主義社会では、割譲された領土は、分断され、本国経済の構造のなかに統合された。第4に、資本主義以前の社会では、支配階級内部の議論は、通常、膨張をするかしないかの問題をめぐつておこなわれた。資本主義社会では、支配階級は、普通、膨張の方法として何が最上か、という問題に議論をもつていくものである。」（James O'Connor, *The Fiscal Crisis of the State*, New York, 1973, p. 170. 前掲『資本主義とアメリカの政治理念』、202ページ）
- (5) 帝国主義世界大戦の基本的性格および大戦のくりかえされたことにかんしては、拙稿「第一次世界大戦と帝国主義」、『経済学論集』第11巻第3／4号、1979－80、を参照されたい。
- (6) アメリカが植民地拡大に特徴づけられるような帝国主義国になかなかない理由として言われることについて、グリーンバーグは、つぎのようにのべている。「なぜアメリカ帝国主義が反植民地主義的形態をとつてきたかにつ

いては、いろいろと臆測されてきた。ある者は、アメリカ自身が過去に植民地であったことが、そのような関係を他の諸国民に強要することをイデオロギー的に困難にしている、という。また、他の者は、アメリカ自身が国内的に帝国であること、すなわちインディアンの撲滅と米西戦争の勝利のあとは、太平洋にいたる広大な領域が利用可能となったため、外的な植民地展開が必要でなくなったという。また別の者は、20世紀にはいって、既知の世界がヨーロッパ主要列強によって分割され分配されつくし、アメリカの欲望をみたし得る土地はほとんどなくなってしまっていて、アメリカがその時点で膨張主義的衝動を克服したことをあげる。さいごに、1900年以降アメリカが資本主義世界の工業のリーダー（ただし金融のリーダーではない）となったことによって、世界中のあらゆる地域と自由に貿易するばあい、アメリカが世界貿易のなかで支配的な地位を占め得る経済力を獲得したからだ、という者もいるのである。世界のなかでのこのような客観的地位のために、アメリカは、自前の植民地をもつことよりヨーロッパ諸国の植民地にわりこむ権利をむしろ要求するようになったというわけである。」（前掲『資本主義とアメリカの政治理念』，204-205ページ）

- (7) 溪内譲は、つぎのようにいう。「社会主義は、通常、思想・運動・体制に区分される。……『思想』としての社会主義は、もっともながい歴史をもっている。社会主義の名を冠した思想は、1830年代にヨーロッパで誕生した。社会主義は、ついで社会『運動』となり現実的影響力を拡大していく。社会主義が『体制』として確立されたのは、もっともあたらしい。」（溪内譲『現代社会主義を考える』，岩波書店，1988，8ページ）氏は、そのうえで、体制を思想・運動から切断したり、体制の論理から思想・運動を逆に規定していくクレムリン学的傾向にきびしい批判をしている（同上，9ページ以下）。
- (8) 経済的・政治的諸問題が錯綜したとき、事態の收拾に最終的に有利な立場を獲得してしまうのは、巨大資本などのメイジャー勢力となるということを豊富な事実で物語ったのは、グリーンバーグである。かれは、諸勢力対抗のなかから巨大資本がワシントンの権力と結託していったのは事態の決着をつけていったアメリカの事例をたくさん紹介している。前掲『資本主義とアメリカの政治理念』，各章，参照。  
(1994年10月)